

【史料】

近江商人小林吟右衛門家の経営書簡集（抄）十

—文久三年本店宛江戸店・京店書簡—

末 永 國 紀

「本家要書簡」（#2910）

文久三年亥年十二月（日付不明）

小田蒔村助成米

小林吟右衛門

文久元辛酉年十一月七日京都伊勢屋藤兵衛潰二付、身分不相応之大金損耗致候、忽必至二手間致候二付、段々骨折他借致し漸々相凌候処、右の外ニも心配相重り、逆も私身上向勘定致し候得共、難相立候二付、対先祖無申訳不相濟候得共、家の大切不捨置、自身恥辱無厭無撓逼塞致し、入口戸ノ世間へ遠慮致し、先前の通候約第一相考相暮し被居候、依之戌年助成米相休候、付而者商売向精々相励、年数相立候ハ、出情可相成哉与存被居候処、文久三癸亥年七月廿三日夜、於京店浪士入込不存寄大災難、筆紙ニ難尽、逆も身上難立行心配而已相暮し候故、村中殊の外心痛被致呉、気毒ニ被申居候、依之助成米左ニ

小林吟右衛門

一 正米 三拾表<sup>マ</sup>

右の内、当暮十五表配当、

残し置候十五表、植付飯米手当

右ハ戌亥年植付飯米右同人方<sup>カ</sup>被貸置候処、返済相滞り候ニ付、召仕人の者主人へ不相立旨心配致被成候趣ニ付、来ル子年於役前植付飯米手当の外、不足ニ候ハ、借り入貸米可致候ニ付、返済米約定の限月急度返納可被致候、尚又村方諸事村中諸事心得違の者有之候ハ、助成米相止メ并ニ植付飯米貸米の儀、相断候ニ付、心得違無之様可被致候、其旨答置候、為後証仍而如件

文久三癸亥年

十二月

庄屋

横目

外、役人中

最初<sup>カ</sup>訳読誦被成候

此帳面年々役人立合配当の節読可被七聞候

殊ニ京都いせや藤兵衛潰不慮の儀出来、当惑致し候得共、格別了簡遣候、無差別是迄助成米役前へ差出被置候得共、先頭の通必至の訳、極月晦日<sup>カ</sup>無抛逼塞戸<sup>メ</sup>遠慮被致候儀ニ付、戌年<sup>カ</sup>諸事被相改候得共、是迄村中極難の衆へ被差送候金も有之候ニ付、助成米左の通被遣候

一 ね年立合候節、此帳面勘定差引相記し可被渡候事

文久三年七月廿三日

天誅脅迫状

吟三郎 彦太郎

庄兵衛 市次郎

右当夜不罷居、追而加天誅もの也

三条東洞院西エ入

丁子屋吟三郎

仏光寺高倉西エ入

八幡屋宇兵衛

室町三条上ル

布屋彦太郎

同 父 市次郎

葭屋町一条下ル処

大和屋正兵衛

此者共儀、近年幕府私ニ交易相許候以來、一己の利潤貪取らんため、銅錢蠟絹糸油塩、其外始日用の諸品買メ、横浜長崎江積下し夷賊共江相渡候ニ付、物価益々騰貴し、万民困苦ニ堪ス、甚敷ニ至り而者流離飢渴及候もの共不少、実ニ不便の至ニ候、於人心惑

さる事、畢竟幕府の悪政致し候と頃、且ハ乍申我大恩国の民と生れ来たり、御国恩一分の一も奉報心も無之而已ならで、恐多も上の御趣意を相背キ、貪獸ニもおとる幕吏夷賊を率ひ、我國民を賊害いたし候段、言語道断不届至極ニ付、天下億兆二代而加誅戮令梟首もの也

亥七月廿三日朝

右の者の外、大坂長崎宇治岐阜飯田長浜、西国東国等奸商共一々取調、三族共至絶し申もの也

右の者共<sup>右</sup>金銀借用仕候ものハ一切返済ニ不及、自然町奉行<sup>右</sup>取立ケ間敷儀申立候ハ、早々賊吏とも姓名相記し、三条四条等の橋上ニ張紙を以願出もの也

七月（日付不明）

布屋の嘆願書

嘆願

願主 下人中

布屋市次郎

并ニ彦太郎

兩人儀

是迄於横浜表呉服糸等交易仕居候段、深恐入候、全の儀者心得違仕居候

其地御運上所御令辞被為在御座候事而已存知、天恩御国恩の義も不相弁候段、誠ニ慙愧至極無申訳候、此度

天誅の御張紙ニ恐入後悔及血涙改心仕候、右ニ就而ハ、是迄交易の心組の持溜居候呉服糸類等、其余の諸品家財金銀ニ至迄、不残

没入被為仰付候ハ、万々分の罪滅尔相当り可申候哉与、深有難仕合奉存候、

右の次第二被仰付候上ハ兩人の主人御助命被下候様、御憐憫を以御聞濟被為存被下置候ハ、有難仕合奉存候 誠恐謹言

七月

上

此書付、嘆願の義ニ御座候ゆへ、何卒暫時の間為御張置被下候様奉願上候

八月（日付不明）

丁吟の助命嘆願書

乍恐嘆願

丁子屋吟三郎

下人共

私共主人

吟三郎儀

一 近來於横浜表交易場所御取立ニ付、乍恐凡欲ニ迷ひ右交易筋ニ携候段深奉恐入候、実ニ天恩御国大恩御儀不相弁、前顯為体の始末、今更悔万罪重ニ付恐縮候、向後急度改心仕正路の渡世仕度奉存候、右体大罪の者共の儀ニ付恐多御嘆願ニ者御座候得共、責而者斯大罪為聊減、是迄交易仕候而持溜候財宝金銀者勿論、諸品不殘投入被仰付被為下置候様奉嘆願候、右御聽届ケ被為成下置候上者、前件金銀并諸品御時節柄御用ニ御高計被為成下候ハ、冥加至極仕合ニ御座候、尚亦町内中江格別ニ心配迷惑相掛、

何共縮入候次第第二御座候、何分町内ニ而者不斗難事ニ御座候間、何卒御許容被仰付被下置候様伏而奉願上候、斯奉嘆願候上者毛頭違變不仕候、此上恐多御頼ニ者御座候得共、主人吟三郎御助命義を頼而奉嘆願上候、幾重にも右願の趣御聴被為成下置候ハ、冥加至極真以有難可奉存候、呉々も御憐憫御沙汰奉仰上候

恐々謹言

八月

上

七月卅日

僧雲涯による助命嘆願

布屋彦太郎

市次郎

丁子屋吟三郎

大黒屋庄兵衛

右の者、奸商ニ携、不顧衆人難渋一己の利分貪り、其罪不輕被遊梟首候者ニ承り候得共、乍恐此者共を貫請、拙僧弟子ニ仕、是迄被致難渋候対諸人菩提為報国恩、出家申度奉存候、一人出家スレバ九族天生ス共御座候間、功德広大ニ候得者、此者勿論親属共永ク御借恩不忘却仕、御用御座候節は、有難く相働、子孫至迄現当二世仕合ト奉存候、御大恩奉謝可申上候、此段御賢察被為成下、以御憐愍此者共の助命御免被為成下候ハ、重々難有奉存候、依之乍恐奉願上候、以上

亥

七月卅日

僧雲涯

御浪人中様

七月廿九日

浪人より布屋彦太郎奉公人への返答

布屋彦太郎

下人共

其方共嘆願の趣ニ而は、彦太郎父子弥々改心致し、御国恩を奉報旨左も可有事ニ候、乍去大罪を犯候者卒爾可赦筋無之候得共、尚考の上ニ而可及沙汰候、其旨可存

尚又申渡

其方共宅江浪人躰の者罷越猥り金錢無心等申込候共、決而正義の者ニ而は一切無之候間、頓着不致早々最寄の方江可訴出候、即刻人数さし向召捕へくもの也

亥七月廿九日

右、室町姉小路南東の門柱ニ掛有候

七月廿九日

浪人より布屋彦太郎の助命条件

布屋彦太郎

右の者下人共々嘆願筋難聞届候得共、左の通執行候得者、助命の儀聞届可申事、但し五畿内御払の事

一、交易之品不殘洛外持出し、五日の間焼捨可申事

但し家財日本の品、其俣ニ差置可然事

一、金銀は交易以来の物、不殘封印町内年寄中江預ケ置可申、追而御処置被仰付候事

右の条々相違有之ニおいては、再ひ可加天誅者也

近日、浪士共猥り金子無心等申込候趣相聞候、右は貪よく起シ候義ニ付、已後奸許与相心得、右様の義頓着致間敷候事

七月卅日

浪人より布屋彦太郎奉公人へ申渡し

申渡

布屋彦太郎

下人共へ

一、昨夜格別の勘弁ヲ以老中沙汰相待候様申渡候処、別ニ何者の所為ニ候哉、同夜張紙ヲ以交易品焼捨候様申付、其身共当惑ニ及、右張紙二種共町奉行所江持出、裁許ヲ乞処、幕吏明々焼捨候趣、慥ニ聞込以の外の次第二候、一体、交易の洋品焼捨候共、御国恩ヲ奉報ニも無之候間、指当町内江預ケ置追而沙汰候迄、急度相待べくもの也

七月卅日

八月十三日

名目金の金貸し業者を対象にした天誅依頼

妙法院宮御貸付役人



富小路夷川辺二

津田織部

堀勘太夫

右の者預<sup>マ</sup>而、宮の御名目を銚り手広金子貸付、口入料と称し過分の金子ヲ掠取、期限遅候向者、自分召仕の奴僕を以金催促、借主并連印人<sup>カ</sup>喰用を取立、彼是申聞候而は使の者高声を以呵り、理不尽ニ取請持歸り候而、以の外なる儀ニ御座候、事ニ依而は出役ト号し昼夜不限多人數召連レ差向ケ相働キ候次第、御時勢柄貧錢のもの難済至極の有様、不忍見事ニ候此段如何存じ、正義士御衆中江御訴申上候間、篤ト御憐察御調被下候様、偏ニ御希申上候 以上

八月十三日

桜田門外の変後の彦根藩への出金内訳（二代目吟右衛門筆）（年月日不詳）

於江戸御元方御勘定所へ

丁子屋吟次郎手代

日勤 藤兵衛詰切

京岡替 いせや藤兵衛手代

同 武助詰切

三月四日

一、千両

江戸店調達金

六日

一、二千両

右同断

ノ三千両

三月九日<sup>ㇿ</sup>

一、千百両

於在所御筋方へ、御返金納

三月十一日<sup>ㇿ</sup>

一、二千八百両程

御産物方御返納金納

三月九日

一、千両

献金上納、江戸納、為替

一、五千両

御調達

ノ壹万貳千九百両程

三月九日

一、三千両

御調達

御公用方

宇津木六之丞様

同 左近様

御元方役

大久保盤八郎様

於江戸御元方様より御調達被仰渡候

松居久左衛門

松居久右衛門

在府手代

伊勢屋藤兵衛

文久二年十二月十六日（京店、中久より本家宛）

金銀相場・米相場の報告と京都・大津間の追剥ぎ出沒への警告

一 金相場比日追々下落仕候二付、尋合候所、新式朱銀、壹両銀吹増の噂有之候二付下落仕噂ニ御座候、江戸表正銀三千貫目御買上ケニ相成候趣、其間も有之候、江戸銀相場八拾匁内ニ相成候、御承引置可被成下候

一 比日夜半甚不用心ニ御座候、大津間ニて時々追ハギやうの者出申候、切殺致し候、夜中淋敷事ニ御座候、先達而令<sub>レ</sub>庄兵衛様朝早立の節追分辺ニて被殺候人有之候ト送り申候、前夜の咄シ店若者申居候、早立又ハ日暮テハ用心第一ニ御座候、冬分御登り

被遊候御方、在所極早立ち、又ハ道泊りにても、大津<sup>ゑ</sup>ハ日暮てハ用心悪敷御座候間、何卒御心得置奉願上候、

一 三人組合千貫目、今以何の御沙汰も無之候、御備金ニ相成居候様承り居候、御差図次第、執斗可仕候、左様思召可被下候

一 御扶持米

三百十三俵卜二斗一合

八五金、七十八匁五分副

右御払被遊候段被仰下候、奉承知候

一 米相場追下直の趣承り申候、昨日宮津様役人御出被下候、大津御払米酢米極上物にて百五拾匁、扶持米者段々直下直ニ御座候

趣被仰候

京相場

八日 八十二匁九分

九日 八十二匁八分九厘

十日 八十二匁七分九厘

十一日 八十匁匁九分

十二日 八十匁匁七分

十三日 八十匁匁六分五厘

十四日 八十匁匁七分

十五日 七拾九匁

十六日 八拾匁

文久三年正月廿三日

池内大学の斬奸状写

池内大学

此者、從來高貴の御方の恩顧を蒙り、戊年比正議之士ニ随從致し居候処、遂ニ反復曲吏ニ相從ひ諸藩誠忠の士を斃し、苟自被免候、其罪惡不容天地、依之加天誅令梟首もの也

亥正月

右、今曉難波橋の中段ニ、垣竹三本組合せ、其上ニ首を載セ御座候、彼ハ元來京都の住人ニして、先年江戸表へ御召捕ニ相成候儒者ニて、無程京地御追放の後、当地今橋心齋橋筋東入ル処ニ居住罷在候、昨夜半頃外出の戻り、自宅の入口ニ而何者とも不知切殺し候由ニ御座候

正月廿三日

文久三年正月

一橋慶喜入京時の噂

一ツ橋殿度々参代被成候得共、伝奏御達無之待暮し、御帰還ニ相成候噂ニ御座候、旅館六条の下馬前乗打越被成候趣ニ付、六条の下馬ハ当所<sup>ル</sup>御取上ケニ可相成候杯噂御座候、色々ニ風説御座候、不評判ニ御座候  
一 因州様御帰国の所、兵庫迄御下り被成候所へ一ツ橋<sup>ル</sup>早飛脚参り候、右ハ兄弟の事故頼ミニ被行候等噂御座候、一昨日御着ニ

相成申候

文久三年十一月十八日

稲本覺兵衛宛 (吟右衛門・吟次郎)

一 昨日者御紙礼被下忝拝見仕候、弥々御安泰可被遊御座珍重奉賀候、然者陰徳の儀御導引教被下候、不殘難有奉存候、乍併安政二卯年正月朔日夜、当村方家数四十六軒其外元来鹿末之建物不殘焼失仕候、其節川下如御大家陰徳家も聞及候得共何方<sup>も</sup>御助成無之候、私方親類并ニ奉公人家へ類焼候分、手当遣し其外数軒へ乍少々為見舞差出候、

一 何某か不存知候得とも御助成被下難有被悦居候、極内無名ニ候得共<sup>可</sup>方<sup>も</sup>陰徳噂候

一 従御上様御救米被下置、乍恐冥加至極難有、焼人<sup>も</sup>悦被居候、右の外者不承候、附而者宜敷儀ニ候得共、上出筋近所隣村何事も付合不致候得者、難相暮此段御推察被下候

一 伊勢藤貞助兼々御聞及有之候通り、陰徳人殊の外致出金、尚又諸人へ陰徳教訓被成候、然ル処悪心者故、私方振込金大金有之候処、其節ニ至大坂持合金万甚振込金不殘謀計掛り、私方数多預り入金共一時二大損毛ニ相成候、拙家難立行無抛逼塞致候、誠ニ御先祖へ申訳無之御恥ケ敷儀ニ候得共、成行無是非御推察被下候、漸々世間遠慮致し罷在候処、当八月京都災難必至心痛仕居候得共、時節因縁ニ任居候所、親類<sup>も</sup>道明ケ御方へ手筋を以頼込被成候ハ、壹万金差出し献金致候ハ、為褒美心配無之趣被仰聞、任其意取斗ひ被成下候、然ル処九月十八日騒動砌、俄ニ出金可致冒被仰渡候ニ付、諸方<sup>も</sup>借り入早速持参仕候も追々日限相立候内、御呼出相成候、御下ケ金当分御預ケニ相成候趣被仰渡、右金子夫々時借方へ返済諸方へ仕置候、尤も何時成共出金可致書付差上置候、然ル所右金子私手元ニ有之哉ニ諸方<sup>も</sup>被目掛候間、種々被申込甚心痛仕居候所、無抛方<sup>も</sup>右の内当分入用迄出金貸呉候趣被頼込、私手元ニ持金も無之、私方并ニ親類殊の外心痛被致候、右等の訳柄ニ御座候間、私心痛病氣相成候、

今以上京不致不都合御推察可被下候

一 江戸振合追及御間被遊候、浪士か何者の仕業か不知候得共、度々張紙有之、既二別家丁子星甚兵衛手代吉兵衛、被切付即死、其外数多即死怪我等、唐物屋一統今以戸メ休業被成候趣申来り候、右二付諸店<sub>カ</sub>追々施し出金にて漸々当分通被成候、私方外振合出金被成候趣、繰綿當時式百三拾兩余相庭買入、初相庭百九十八兩壳捌被仰渡、右損金相立、日々何時何事出来候哉難斗、心痛致少々宛商売致来り候趣心配致居候、右等の訳柄故於在所心痛仕居候、迺も私方難立行此段御賢察可被下候、右の振合御座候間、当時の姿多少二不拘出金の儀出来兼候、逼塞中何事も御免可被下候、何卒御尊公様御鼯眉御引立ヲ以不相替相続仕法御考方可被成下候、尚其外申上度儀有之候得共、得尊顔万端御物語御願奉申上度候、以上

一 伊勢藤江戸出店伊勢嘉義、今以訴訟埒明不申候、私方地請人二相立種々掛り合迷惑致候、此段御察可被成下候追啓申上候、誠ニ御恥ケ敷義奉申上候間、此書状御一読の上、直様御戻し可被下候、右為念奉申上度候、以上

十一月十八日

小林吟右衛門

吟次郎

稲本覚兵衛様

文久三年（月日不明）

奉公人栄助の奉公中の衣服規定違反に対する詫状

実父 新七改名

奉公人 栄助

一 此忠兵衛義、去ル安政六己未年三月~~より~~来ル申年三月迄九年十三ヶ年相定、我等請人ニ相立御奉公差出置候、年限不相立勤中之内、去戌年九月永の暇願出候処、御聞届ヶ被下忝奉存候。然ル処勤中所持之品着類の内、御支配人御断不申上候、私ニ勝手取扱不筋御家風相背、御立腹の段奉恐入候、右ニ付御託入御聞濟被下、此度所持之品龜着類共不殘相渡し被下候、慥ニ受取申候、為後日仍而如件

文久三

長浜

請人 喜右衛門

国友

証人 次兵衛

半次郎改名

忠兵衛

文久三年十一月（日付不明）

外国貿易商人への天誅予告張り紙の写

張札写

小網町三丁目横浜荷物積問屋桑名屋見世格子ニ見事の手跡ニて認有之張紙の写

近年異賊共吾皇国の大平内統武威衰候時ヲ見込渡来、和親通商条約調候後、莫太の乍得利徳ヲ深謀斗有之、彼国沢山生産龜物の銀ヲ以皇国万民丹精の諸品と交易致し、諸品高直ニ相成諸人の困苦難尽筆紙、於公辺ニも御仁政の思召顯書致候迄ニ不及、夫々御制



度被為在候処、横浜留船の醜夷鎖掃攘も豈而諸人の知処、先般御事務致置応接も有之、御一概ニ打払と相成候而ハ、都下初メ海岸筋賊焰の為放火の程も難斗、就中諸色価高直万民の困苦見事難被為忍、御制度内外両端ニ被為相廻候処、弥增御国体ヲ惱スニ至而、報国の義士我党公辺の御事務御痛心奉恐察候、忠孝の大任ヲ差置身命ヲ擲、為天下の夷賊掃攘し万民安堵為致度、執志必死ヲ極彼是気配致事寸暇も無之候得共、其時ニ不到、然所万民有用の重品ヲ強欲の商民共、匱物の銀と引換候間、物価高直ニ相成、諸人の難渋不成一方、横浜気配強欲の商民ニ至候てハ、今ニも横浜鎖湊ニ相成候ハ、結句金穴ヲ塞底意ニて、諸人の難渋ヲ不厭自己の利欲ニ迷ひ御制度の虚ニ乘し、或ハ拔売横浜運送の渡世の者ハ、表裏ヲ以夜積隠積舟移し等手配致し、就中駿遠三尾勢の欲民等於其地ニ荷品運送仕立、横浜直揚ニ積下し候、此度我等党国々へ出張心得違無之様申論、改心不致時者不得止事欲民共速ニ加天誅候、国ヲ治、天下ヲ平、国ヲ豊、子ヲ富祈候事当然の処、国家第一の品々異国へ相渡し、天下一統困窮ニ相成万民難渋眼前ニ有之、品柄ニ寄天下国用ニ差支候ハ、国辱顯ニ至、是等強欲の商民共其慮もなく、己レレ之欲ニ天下万民の難渋厭ひ無之段、言語ニ絶し不屈の者共ニ候、我等党先達而中当面張紙差出候所、相止メ不申盛ニ致し候段不束ニ付、長立候者共方へ罷越利解申論候処取用不申、却而義士ヲ嘲哂の姿ニ仍而、横浜運送荷高取調候所、彼ノ地開湊以來其方<sup>6</sup>運送荷品多分ニ有之候間、先月十八日夜我党罷越、前条利解申候候所、委細申訳ニ付其仮差置候処、其後相止ミ不申、今以其方と野田屋与助兩人ニて隠積夜積且者舟移等ニ致候、綿類諸品莫太赤心報国の義士ヲ欺候仕方、假令下民賤卒成共無謂殺害ニ及候事、士道之本意ニあらず、其方等利欲ニ迷ひ天下万民ニ対し不実の所業ニ付、無捩厳談ニ及候所前件次第、我等党其方初横浜気配運送筋の者等不殘加天誅万民の助と可致候へ共、格別の仁恵ヲ以一応勘弁致し置候間、一統厚心得、彼地運送荷品受払の者へ其方長立急度申聞、已後相止メ候様可致、此上不得止事義御座候ハ、死罪也

名前左之通

小網町三丁目

小網町三丁目

桑名屋

野田屋

同 二丁目

同 一丁目

小松屋

松坂屋

小舟町

坂本町

佐野屋

大井屋

同

本舟町

木屋

大村屋

右此書面三日の内張置、其後ニ至御奉行所へ訴可出候、若等閑ニ致候へ者急度可及沙汰事

文久三年亥十一月

報国義士

文久三年（月日不明、小林吟右衛門・親類中）

天誅被害につき丁吟本家より別家杉村甚兵衛家へ暖簾替と交易中止の要請

弥々御安全ニ被成御入候日出度く存候、然者先月廿五日夜、甚兵衛手代吉兵衛御災難即死被成候趣承り驚入候、誠ニ御気の毒ニ存候、嗚ニ統御心配御愁傷の段察入候、附而者丁子星御咄之趣、お上方横浜交易九月中ニ引取埒明ケ改心被成候趣承り、甚兵衛処置如何之振合ニ御座候歟、延日ニも相成候ニ付違変の訳、今度被加天誅候趣噂聞取、右惡説ニ候歟難斗候得共、此度御懇情の御方々御心切ニ為御知被下候、此後本店迷惑相掛り候趣ニ被申候、のふれん仕替本店相除ケ候ニ付早速申し遣し仕替候、左候得者双方御為方ニ宜敷、本店別家者親子の訳柄ニ御座候間、右之姿本店と差留の義不用候者、本店不行届キ同罪と相成候趣御咄し被致候間、親類一統心配致居候、是非／＼のふれん御仕替可被成候、右の趣当人呼寄相談ヲ以急度可被申渡候

附而者八月於京都災難の砌追々申入置候、兼而交易改心丁子星右同様相止メ改心不被成候ハ、のふれん取上ケ家号共仕替可被成候趣相達し有之候処、江戸表先月廿五日振合（以下欠）

小林吟右衛門  
親類中

仮令のふれん仕替被成候共、交易堅相止メ可被成候

年月日不明

伊勢藤倒産による損失額と損失者リスト

両替戸メニ付

一、拾貳万七千両	小田蒔	小林吟右衛門
一、拾壹万五千両	位田	松居久右衛門
一、三万五千両	金堂	外村与左衛門
一、三万七千両	金堂	外村市郎兵衛
一、壹万七千両	位田	松居太七
一、八千両	山本	上田与左衛門
一、五千両	同入	
一、貳万貳千両	山本	小泉新助

枡吉殿へ入込

一、五千両	山本	土橋藤兵衛
一、七千両	清水	松居久兵衛
一、六千両	清水	松居忠兵衛
一、千貳百両	清水	布屋九右衛門
一、金千両	勝堂	広田善藏
一、三千両	北之庄	丸屋忠兵衛
一、貳千両	木流	総屋徳右衛門
一、三千両	北之庄	高田善右衛門
一、貳千五百両	北之庄	炭屋忠兵衛
一、八千両	町屋	市田源右衛門
一、貳万両	町屋	市田太兵衛
一、貳万両	位田	松居亀右衛門
	北之庄	藤居善助殿
一、千貳百両	山本	服部又七
一、貳千両	須田	深尾文治
一、貳千両	町屋	塚本武右衛門
一、貳千五百両	川並	外村清二郎
一、千六百両	木流	竹中佐兵衛

一、五千両 北之庄 松居九郎右衛門

一、三百両 紅屋 太兵衛殿

一、三千両 市田 米屋太兵衛

一、貳千両 位田 松居庄右衛門

一、三百両 町屋 市田宇右衛門

一、貳千両 位田 松居甚右衛門

一、八百両 彦根 布屋喜八

一、五千両 能登川 布屋喜兵衛

一、二千両 稲葉 渡辺又兵衛

右の通り御座候、此外夥敷御座候、不尽筆紙申上候

嘉永六年ノ文久三年間の彦根藩士大久保藤助への貸付金と返済記録

大久保藤助様勘定書

丑十一月廿三日

一金 拾五両也 午四月十九日、在所へ為登

丑百四十六

十二月四日

一金 貳拾兩也

午四月十九日、本店へ証文為登かし

寅正月六日

一金 貳拾五兩

午四月十九日、証文為登置かし

寅正月改

一金 拾兩壹歩

丑七月廿九日分、国本本店にてかし、八月<sup>五</sup>

三匁 十二月迄利足共

ノ金 七拾兩壹歩

かし

三匁

（朱筆）寅年<sup>五</sup>十ヶ年崩、月三朱定

十二月十七日

入金 七兩壹歩

本店入

三匁

卯十二月

入金 七両

本店入

辰正月ろ

引ノ金 五拾六両也

辰年分

入金 七両也

本店入

引テ

安政三年丙辰十二月改

御主人様御筆、癸丑年ろ元金七拾両十ヶ年

一金 四拾九両也

割済受取引テかし、利足月六朱

寅ノ年ろ十ヶ年賦

元金壹ヶ年七両宛済方

巳ノ年分

内金 七両入

店嘉兵衛様書

午三月晦日、本店へ付替、此所消

午四月十八日、京店へ、エ百三番付替へ

文久三年（月日不明、江戸店からの書簡）

天誅回避を口実に金品を騙る浪人との折衝

一筆啓上仕候、向寒相成候得共、先以其御地御店衆中様御揃益々御機嫌克可被遊御座珍重御儀ニ奉存候、随而下店無別条罷在候間、乍憚御休意思召可被成下候、然ハ御尊君様御出立後当地相替事も無之、穩ニ御座候、諸商内も不相替諸品捌ケ方宜敷候、当方も相応ニ闊ケ敷候間御同悦ニ奉存候

一、浜表も相替候風説無御座候、唐物屋衆者当時相詠メ被居候風説ニ御座候

一、五品取扱御触書別紙之通御座候、御一読可被下候

一、糸会所行事と取締の儀御免願ひ被成候得共、御免願ハ不相叶候ニ付、矢張是迄之通り順番会所詰致し居候得共、時々浪印杯参候間誰も顔出し不望、拔勝ニ御座候間大イニ糸会所詰人混雜致し候

一、当朔日朝、本庄三笠町浪士中村老人被参支配人二面会致し度候趣、支配人者留守ニ付金七面会被成候処

浪士中村御尋口上

京吟三郎ハ当地被居候哉、京浪士と当仲間者へ吟三郎取退しニ付、於御地加天誅可申旨来状御座候嚙、当仲間内ニも善悪者も御座候ゆへ何用出来候而も氣の毒ニ存候間、内々知れ候趣

金七答方

京店元来交易ハ不致候得共、七月中浪士被参存外災難ニ出逢候ニ付、当店も浜取引一切相止メ申候、猶又吟三郎殿登りの由答置候、然ル処

中村と被申候儀ハ

何時乱妨人参候哉も難斗趣咄し被致候ニ付、左様の儀出来候へは甚々難渋及候間、何卒災難無之様御取りなし被下度旨頼込候処、



此方へ被頼ル訳ケニも不參御氣の毒ニも察入候間、中々工夫六ツ敷被答、夫故へ右中村宅相尋置、翌二日朝（巻百五拾四）金七浪士屋敷へ参り、右中村両国柳屋迄呼出し、一献差上、金七市太郎兩人ニ而災難不出来様段々咄し合仕候処、何分中村殿心配致し、難決ニ不相成候様工夫可致旨被答候、仍之右悪人共氣ヲ納方道造、当座為入用ツ吉丁遣し候、此後ニ如何成行可申哉訳りかね候得共、先々安心廉ニ相成候、何れ跡出金も多少共出来候哉と察入候得共、多分ハ出金致不申心得ニ御座候

一、前儀金七市太郎殿掛合他行中、店へ又候浪士人被参、次兵衛掛合ツ丁貸遣し候（貳四）

一、丁子星、大吉、丸文、佐羽四人（貳四）ツ天丁出金被成候儀、先達而申上候、定めし承引被遊候哉と察入候、其後丁子星方へ浪士人参りイ天出金被成候由ニ御座候、又当二日同家へ一人参り三両遣し被成候趣ニ御座候、いわしやツ天丁丸七深川イ天モ吉丁出金被成候噂、外ニ而も御座候へ共、何れ様内々被出候間訳りかね候、綿屋衆へも被参噂ニ御座候

一、当四日朝、中村殿人形町大和田（巻百五拾四）呼出し被成候二付、金七市太郎罷出候へは当仲間外、

名前 八王子藏人

井上太郎

此兩人方へ京（巻百五拾四）来状有之仁ニ御座候趣

中村殿（巻百五拾四）右人へ挨拶申入候処、吟三郎又ハ支配人ニ而も加天誅上京致候旨申候二付、右様成儀出来而ハ御氣の毒ニ存候事故、何程歟出金為致候、勘弁致し被呉様咄し合被致候へハ、三千両も馬附ニ而上京致し度と被申居、存外之申立と中村も相心得、段々示談及先イ天丁出金致し候へハ、右悪人共取押へ可申旨中村被申候、仍之無是非百両出金致し、外ニ挨拶人中村着用物小袖式枚上下沓具注文被成候、右様の儀申被立実ニ迷惑次第二候得共、此節世間ニも色々風説有之困入候、心節（巻百五拾四）ヲ以申来り向合候得共同穴狐ニ御座候

一、當時八丁堀役人衆もふるく之由噂、時節乍申心痛而已致し居候、乍餅京地而ハ違、大防（マ）ハ不致候、多少共出金致し候へハ穩

成掛合相成候と察入候、何歟甚気味あしき事而已、筆紙も難尽、委敷事ハ貴顔之節可申上候

一、当九日中村殿より呼出被成候ニ付、金七他行候処、右悪人共方へ前申上候百両夫々割遣し、最早天誅ハ無之由安心可致旨被申候間、

御安心可被下候、乍併万端相心得可申候、此節ハ八丁堀旦那衆捨置、浪印世間一統御出入様二相成候時節相替候事ニ御座候

一、糸会所へ浪印被参糸浜出し早々出荷可致旨被申候仁も御座候、又出荷差留仁も御座候間、何歟頓と訳かね候、猶又積間屋木屋、松坂や、糸半方へ浪印参り、当地有之糸ハ早々出荷可致旨、跡者決而不相成候趣被申浪印も御座候、上州辺商人より色々浪印方へ差込被成候風説も御座候

前振合ニ而当年ハ諸造用も相応ニ掛り可申旨察入候間、此儀御容赦可被下候、猶又前儀他行致し候へハ加天誅坏と被申候間、決而他言御無用、御説被下候ハ、火中可被成下候

一、今綿相場三州百廿八両ニ相成候噂ニ御座候、浜へ多分売行噂も御座候、浜表生糸矢張不相替売行申候噂

右商内致し不申、常商売大切ニ相守候間、御安心可被下候

一、逸物も一方より双方ニ置方可然候様一統申居候、此儀御勘考可被下候

一、何れ様も御身御大切ニ可被遊可被下候

早々以上

文久三年三月十八日

江戸町触れ

小口年番名主

一、御関所女手形の義、御留守居衆御手判可相願義ニ候得共、此節柄俄ニ発足等の者手数相掛候而ハ、自然不都合も可生候間、人数高名前相認め町年寄江申出

判鑑請取右判鑑

御関所江差出通行可致候、尤此度限り候条、此旨可相心得候

一、中川御関所右同断

但し町年寄共江申遣候願書小女髪切屋鉄醬染等の内訳ニ不及、在方参候所、何御関所判鑑相願候趣、人主並名主両印

右の通段々行届候様早々可申継候

亥三月十八日

右の通被仰渡奉畏候

但し世話掛り

名主共

一、此節市中老幼其外女子病者の類非常手当の為、在方所縁等江取退又ハ場末町ニ明キ店借受候者数多有之候ニ付、一時ニ取徳ニ拘り過分の店賃前以受取、舟賃駕籠賃格外ニ引上、過当ニ貪り候もの有之由、自然右ニ付取退方差支候者も出来致、諸人及難儀候趣相聞、以の外の事候、右鉢の者ハ追々相糺召捕嚴重の沙汰ニ及条、此上心得違無之様銘々支配限、店賃し遣し候者并船持辻駕籠車力渡世其外日雇人足等ニ至迄不洩様急度可申聞、若し相背の者於有之ハ町役人共迄も嚴重ニ可申付候間、急速取締相立候様可致候也

右の通被仰渡奉畏候、為後日店連判仍而如件

亥三月十八日

文久元年二月廿八日

三百石以下の旗本御家人への拝借金給付

大和守殿御渡御書付写

此節物価格外の高直ニ相成、小給の者共別而難儀の趣被為及聞召候ニ付、莫大の御物入打続候折柄ニ者候得共、格別の以思召を部屋住勤の外三百石以下の御旗本の面々并御家人江拝借金被仰付、百俵以下の者者夫々御金被下候旨被仰付候、右者厚御主意を以被仰出候事ニ付、一際質素儉約相用候様可致候、万一心得違の者於有之ハ急度御沙汰の品も可有之候条、其旨可被相心得候右之通り向々江可被相下

二月

一、今度被仰出候拝借金割合左の通り被仰付候、請取方等御勘定奉行迄可被談候

一、三百石 金廿五両

一、貳百石 同貳拾両

一、百石余 同拾五両

御役料ハ相除候事

一、平常の心掛ニ而拝借ニ不及ものハ勝手次第之事

一、返納の儀ハ来ル亥年より十ヶ年賦たるべき事

二月

一、今度被仰出候百俵以下の者被下金割合、左の通り請取方等御勘定奉行可被談候

一、百俵~~五~~八拾俵迄 金拾両

一、七拾俵~~五~~五拾俵迄 同八両

一、四拾俵<sup>〆</sup>三拾俵迄 同七両

一、式拾俵<sup>〆</sup>拾五俵迄 同六両

一、拾四俵以下 同五両

右の通り可被相達候

二月

文久元年八月

吹直金貨の引替についての京都町触れ

京都御触書の写

吹直小判壹分判貳分判貳朱金ヲ以、上方筋是迄の保字正字小判壹分判引替の儀

新町六角下ル

為替三井組 御用取扱所

釜座御池下ル

為替十人組 嶋田八郎左衛門

烏丸押小路上ル

為替十人組 小野善助

右三ヶ所ニ而取扱為引替候間、来月三日より右三ヶ所江差出し、早々引替可申候、引替の儀新小判壹分判者五分、同貳分判者七割、同貳朱金者貳割五分の積りを以引替候儀ニ候得共、先天保金正字金より引替候筈ニ候条、此外者去申五月相触候通り可相心得候

右之通不洩様可相触者也

西八月 伊予 御印

出雲 御印

万延元年三月二三日、文久二年九月九日

江戸店の宇津木六之丞との出納勘定

江戸店写書

安政七年三月十三日改

入金 三百両 預り、り月七朱

字六

同

入金 三百両 預り

字七

万延元申年閏三月晦日改

入金 四百七拾五両 同

字廿九

申九月十五日

入金 五百両

字三十

同

申十二月廿三日

入金 三百八拾両

字三十式

同

万延貳酉二月二日

入金 五拾両

字三十四

同

戊閏八月三日渡済（朱筆）

同日

入金 五拾両

同

字三十五

戊九月三日渡済（朱筆）

同

入金 五拾両

預り

字三十六

戌九月五日渡済(朱筆)

万延二酉二月二日

入金 五百四拾両

同

字三十七

ノ式千六百四拾五両

八月八日

一金 百五拾両

渡し、渡済(朱筆)

戊閏八月三日

一金 五拾両

かし、渡済(朱筆)

同九月三日



一金 五拾両

かし、渡済（朱筆）

同九月五日

一金 五拾両

かし、渡済（朱筆）

同九月九日

一金 百両

かし、渡済（朱筆）

渡 〆金四百両也

差引残り金

貳千貳百四拾五両

預り

年月日不明

藤野、松居宛に伊勢藤一件についての心情吐露（二代目吟右衛門筆）

京麩屋町三条上ル、伊勢屋藤兵衛

江戸伊勢町塩川岸

出店 伊勢屋嘉蔵

十一月十一日夜家出

右、嘉蔵手代不殘家出致候ニ付、地請ニ相立候私手代丁子店藤兵衛、腰繩ニ而八丁堀番屋へ被留置、十八日<sup>〆</sup>廿日夕刻迄疑念解、御下ケニ相成候、右ニ付徳兵衛義外ニ付添人、十八日<sup>〆</sup>廿日迄毎日被呼寄候

右、伊勢藤仕業ニて大變の事ニ相成候、私店大災難、尔今訴訟人<sup>〆</sup>被取相手誠ニ大当惑致し候

右、嘉蔵手代政七家出致し、上京又候下り、十二月八日政七私方<sup>〆</sup>付添人八丁堀へ被呼出候得共、其夜帰宅被致候趣、元来元方の者手輕く、尤も最初と違日數過候分、輕くおしらへ察入候、何も弁へ無之候、私店ハ誠ニ迷惑ニ相成候

伊藤方へ

一 十貳万五千兩余 京振込金、京<sup>〆</sup>手形、大坂ニて不渡り

<sup>〆</sup>江戸取組為替、京ニて不渡り

右、大金損耗ニ相成候、右の内預り金并ニ借り入金も有之候、当分遊金の分利益ヲ好候義も有之候、全私不調法、家内の者親類迄不及申手代迄迄申沢無之候間、不得止事暫く西国辺ニ知る人有之候間、右方へ罷越候、誠ニ乍氣の毒諸事尊公様方跡々宜敷御執斗奉願上候

御上使御調達金、当廿五日限皆納可仕候心組ニ漸々手当致し置候間、手代共<sup>〆</sup>無相違納方被成候間、此段宜敷奉願上候  
十一月六日夜明ケ方迄大金持意心持、翌七日早朝<sup>〆</sup>借金持意心持

誠ニ暫時の間変化、伊藤方兼々心支度被成候義ニ候得共、私方者七日朝<sup>〆</sup>十方暮候、誠ニ残念ニ存候

身捨てこそ浮せも有

此度の大金損毛致し、此候不相替取引致し居候ハ、世間弥高名ニ候得共、彼是及此場障有、私前文の成行ニ相成候ハ、誠ニ永年の勤向も無益ニ相成候、扨々歎敷次第無是非義ニ候

藤野様  
松居様

（すえなが　くにとし・同志社大学経済学部）